

はじめに

まず、はじめに、今回のクロス書評の機会を与えていただいたことに、深く御礼申し上げます。そして書評の対象となる歴史書を執筆されたお二人の歴史家に、心からの感謝を申し上げます。今日は、高校教員の私が拝読して抱いた疑問や違和感を多く述べることになりますが、これは是非、ご教示いただきたいという思いからです。なにとぞよろしくお願いいたします。

1 本書の構成

(1) 小野寺拓也・田野大輔『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』(岩波書店《ブックレット》、2023年)

・目次

はじめに

第1章 ナチズムとは?

第2章 ヒトラーはいかにして権力を握ったのか?

第3章 ドイツ人は熱狂的にナチ体制を支持していたのか?

第4章 経済回復はナチスのおかげ?

第5章 ナチスは労働者の味方だったのか?

第6章 手厚い家族支援?

第7章 先進的な環境保護政策?

第8章 健康帝国ナチス?

おわりに

ブックガイド

☞方法論

☞ナチス概説

☞本論

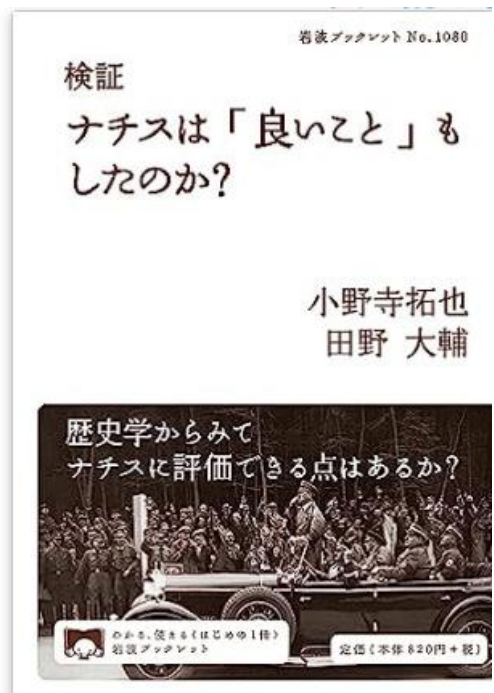
☞歴史認識論

(2) 初出

- ・小野寺氏執筆分「なぜナチズムは「国家社会主義」ではなく「国民社会主義」と訳すべきなのか」(『現代ビジネス』2021年3月14日): 第1章
- ・田野氏執筆分「ヒトラーを「左翼」「社会主義者」と見なしてはいけない理由」(『現代ビジネス』2020年1月18日): 第1章
「新書の役割——「ナチスは良いこともした」と主張したがる人たち」(『群像』2021年7月号、『現代ビジネス』2021年6月27日に転載): おわりに

(3) 分担

- ・小野寺氏執筆分: はじめに、第3章、第6～8章
- ・田野氏執筆分: 第2章、第5章、おわりに
- ・共同執筆: 第1章、第4章
- ・全体を相互に点検し、意見をすり合わせる。



2 本書の「方法論」

(1) 「ナチスは良いこともした」という発言が世界各地で騒動を引き起こしている。

・「絶対悪」としてのナチス認識＝「政治的正しさ（ポリティカル・コレクトネス）」

☞物事には両面あるのだから、良いこともあったのではないか。

☞少なくとも当時は「良い」こととされていたのではないか。

(2) 過去を切り取るという行為は、その時々立場性と無縁ではられない。

・切り取り方、叙述の妥当性は、厳しいチェックの目にさらされるべき。

・「ナチスは良いこともした」という主張には、歴史学の立場から「話せばわかってもらえる」次元と「話してもわかり合えない」次元の両方が含まれている。

☞歴史は、「事実」・「解釈」・「意見」の3層からなる。

☞一般社会において非常に軽視されがちな点が、「解釈」の層＝歴史研究が積み重ねてきた膨大な知見

☞この知見を無視すると「事実」のレベルから「意見」の層に飛躍してしまう。

…自分にとって都合のよいところだけを照らし出して、それ以外が見えなくなっている＝「トンネル視線」

☞「意見」をもつことは自由だが、それはつねに「事実」を踏まえたうえで、「解釈」もある程度はおさえたものでなくてはならない。

(3) **【執筆者への問いかけ①】** 本書のテーマとなっている「問い」は、学問として成立しうる「問い」なのだろうか。

・第一に、主語の範囲が明示的なのだろうか。第二に、適切な検証の手段がありうるものなのだろうか。第三に、純粹に問題関心を深めようとしているのか、それとも論敵を否定するための反語表現にすぎないのか。

・では、次のような「問い」は成立しうるであろうか。成立しうるとすると、答えはYESかNOかの二者択一になるであろうか。著者に伺いたい。

「ナチスと同時期の日本の政治は「良いこと」もしたのか」

「日本の植民地統治は「良いこと」もしたのか」

「スターリンの政治は「良いこと」もしたのか」

「毛沢東の政治は「良いこと」もしたのか」

「レニ・リーフェンシュタールは「良いこと」もしたのか」

「ハイデガーは「良いこと」もしたのか」

「フルトヴェングラーは「良いこと」もしたのか」

「リリー・マルレーン」をドイツ軍のために歌ったララ・アンデルセンは「良いこと」もしたのか」

(4) **【執筆者への問いかけ②】** 「事実」・「解釈」・「意見」の3層構造という方法論への疑問

・本書は、一般市民の歴史に関する認識を「意見」とひとくくりしている。それに対して歴史家の歴史に関する認識を「解釈」と対置する。そして市民の「意見」は、歴史家の「解釈」を踏まえるべきであると、啓蒙主義の姿勢を掲げる。

・歴史家であれ、一般市民であれ、「どう事実を見出すか」「どう解釈するか」自体が「意見」

ではないのか。また、事実の「実証」と、因果関係や比較を見出す「解釈」と、意義づけを見出す「批評」の2種類を、峻別することが必要なのではないか。

(比較) 私の考える歴史実践の6層構造

- 参考：遅塚忠躬『史学概論』＋保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』
- ①問題設定に基づき、諸種の史料の記述を検討する（史料批判・復元・解釈）ことにより、問題設定に関わる「事実の探究」（確認・復元・推測）を行う。【歴史実証】
- ②事実間の原因と結果のありよう（因果関係）とか、つながりのありよう（連関性・構造的性）、そして比較したときに浮かび上がるありよう（類似性・相違性）について「連関・構造的探究」を行い、問題設定に関わる仮説を構築する。【歴史解釈】
- ③その歴史解釈について、より長い時間軸やより広い空間軸においてみたときの意義や、現代の世界に対する意義について、「意味の探究」を行う。【歴史批評】
- ④歴史解釈や歴史批評を論理的・効果的に表現する「叙述の探究」を行う。【歴史叙述】
- ⑤以上の営みについて事実立脚性と論理整合性にもとづいて検証を重ね、特に歴史実証の矛盾や歴史解釈の矛盾のうえに歴史批評や歴史叙述が行われていないか、歴史批評や歴史叙述のありかたが歴史実証・歴史解釈を歪めていないかなどを、他者との協働によって考察する「検証の探究」を行う。【歴史対話】
- ⑥歴史を参照しながら、自分の生きている位置を見定め、自分の進むべき道を選択する「行為の探究」を行い、自らが歴史主体として生きる。【歴史創造】
- 誰もが①～⑥を日常生活のなかで実践している（歴史実践）。①～④を専門研究として行っている歴史家の実践は、一般市民にとって参考になるものである。一連の歴史実践の主体にア priori に優劣をつけるべきではない。

・本書の問い「ナチスは「良いこと」もしたのか」とは、解釈レベルの問い（その政策の経緯と影響はどうであったか、当時の人々はナチスの政策をどのように評価したのか）と、批評レベルの問い（こんにちの私たちはナチスの政策をどのように評価できるか）という二つの問いに分節化して考えたほうがよいと、私は考える。

(理由①) 本書は、「「良いこと」はない」という主張に貫かれている。それは最終的には批評レベルの結論（こんにちの私たちはナチスの政策のなかで「良い」と意義づけられるものを見出すことができない）に収斂している。では、なぜに当時のドイツ人たちは、あれほどヒトラーやナチスを賛美したのだろうか。こんにちでは「良いこと」とは思えないとしても、当時において（道徳的にも実績においても）「良いこと」だと認識されたメカニズムは何なのかを考えないと、当時のドイツ人はただの虚偽意識にとらわれた人々になってしまう。なぜならば、「良いこと」であったか否かは、その成果を享受する範囲やその効果が及ぶタイムスパンによって、評価が分かれてくるはず。

解釈レベルの問いであれば、それが「良いこと」と認識されたこと自体の理由に、ナチスの力を見つめるだろう。そして、そのかぎりナチスの「魅惑」が浮かび上がってくるのだと思われる。

●田野氏の『魅惑する帝国』（名古屋大学出版会、2007年）

——ナチズムにわれわれの美意識をくすぐるような「魅力的」な側面があったことは、ある程度認められてしかるべきだし、これを頭ごなしに否定するだ

けでは、広範な大衆を巻きこんだ「魅惑」のメカニズムに迫ることはできない。われわれの多くが共有する美意識は、少なからぬ部分でナチズムの美学と通底しあっており、これを認めてこそ、ナチズムの本当の危険性は明らかになるのではないかと思われる。(304 頁)

(理由②) 問いの主語を「ナチス」にしたとき、ナチスの権力が強固な一枚岩でなかった以上、政治を担う主体は多様であり、ナチス指導者が思想を共有する度合いはグラデーションがかかっていたというファクトを、緻密に解釈・評価できるのだろうか。実際には、ナチス時代の政治にも一定の多様性の幅が存在していた。解釈レベルと批評レベルをきりわけないと、「良くない」と結論づけるために、あえて視野から意図的に外されていく事象がうまれてくるのではないか。

3 本書の「ナチス概説」

(1) 「国民社会主義」としてのナチズム

- ・「賛同にもとづく独裁」論・・・「普通の人びと」による同意、協力、支持、黙認によってナチ体制は成り立っていた。
- ・包摂と排除のダイナミクスがナチ体制の本質だった。
 - (例) 大規模な軍備拡張は多くの人々に職をもたらしたが、それは来るべき戦争の準備に他ならなかった。
- ・ヒトラーにとって社会主義者であることとナショナリストであることは、ほぼ同義であった。
 - ❖ 社会主義的な性格を強調する全体主義論は、冷戦期の反共産主義イデオロギーの産物である。暴力とプロパガンダを通じて国民全体を統制する体制という全体主義論の理解は、多くの面から批判されている。ゆえに「ヒトラーは社会主義者だ」とは言えない。
 - ❖ (第1章のまとめ) 「私たちはこれまでの歴史研究において何が適切な〈解釈〉とされているのか、それを踏まえて自分の〈意見〉を形成する努力を放棄すべきではないだろう。これによってはじめて、様々な政治的意見をもつ人びとが一定の幅をもった認識を共有することができるのではないだろうか。」

(2) ヒトラーの権力掌握は民主主義の自己破壊を本質とする。

- ・民意を背景にそれを遂行したという意味では、「民主的」。
- ・一方で 56.1% の人はナチス一党独裁を望んでおらず、憲法の脆弱性や物理的な暴力行使によって権力掌握は可能になった。
- ・ナチ・プロパガンダの「絶大な威力」は、広範な国民のもとめるものを的確につかみ、感情を揺さぶる言葉やイメージに転換する能力にあった。
 - (例) 民衆と分け隔てなく交流し。子どもたちに笑顔で接する親しげで人間的なイメージ。
 - (例) オーバーザルツベルクの山荘でのヒトラーと少女ベアニーレとの交流。(少女の祖母がユダヤ人であることが判明したあとでも、交流の写真の流通が止められなかったため、ヒトラーと少女の交流は続いた。しかし、ヒトラーに「優しい心」があったとしても、ユダヤ人虐殺の否定の論拠にも免責理由にもならない。ヒトラーと少女の交流は、男性を主体とするナチスの攻撃性をマイルドに見せるのに好都合だった。

(3) ナチ体制は同意と強制のハイブリッドな現代的独裁だった。

- ・ある政権を「支持するか／しないか」という判断には、「良い／悪い」という道徳的判断だけ

でなく、「利益になるかならないか」という現実的判断も大きく絡んでいた。

～体制と人びととの「ズレ」、実利性、強制的側面を見ることの大切さ。

(4) 【執筆者への問いかけ】

- ・現代史の歴史認識をめぐる論争的なテーマに、「入門書」として、最新の研究成果にもとづいた歴史像を提示しようとした…というのが本書の宣言である。

(比較) かつて南京事件について出版された、南京事件調査研究会編『南京大虐殺否定論 13 のウソ』(柏書房、1999 年) という書物がある。この書物は個々の具体的な論点についてファクトがどうだったのかを考察している。焦点は南京事件が戦争犯罪に当たるかどうかであるが、こちらは焦点が明瞭なので、読者にとって判断しやすい。一方、本書は、「最新の研究成果」を根拠に、具体的なテーマを検討しながらも、最終的には「「良いこと」はなかった」という一つの大きな「解釈」を導き出し、日本社会の人々の「意見」の土台になることを目指している。そのことで、著者が捨象していることはないのか。

- ・ナチ政権が、「賛同にもとづく独裁」であり、人びとを巧みに包摂する面があったからこそ、①なぜ人々が賛同したのか、②その賛同はプロパガンダによるものだけなのか…という問いが、必要なのではないか。

(補足) 本書は、「良い／悪い」という道徳的判断だけではなく、「利益になるかならないか」で人々のナチ体制への支持が左右されたという。ここでも「良いこととしたのか」という問いの論理の曖昧さに突き当たる。この場合の「良い」かどうかは、道徳的判断だけの問題なのだろうか。

- ・「私たちはこれまでの歴史研究において何が適切な〈解釈〉とされているのか、それを踏まえて自分の〈意見〉を形成する努力を放棄すべきではないだろう。」という本書の主張は、「適切性」の名のもとに、「解釈」に関する歴史叙述は the history に向かいうるかのような印象を読者に与える。

- ☛「専門家」に頼くだけでは、ヒトラーになびいたドイツ人と大差なくなるのではないかと自分への問いかけがわいてくる。(「最新の研究成果」を根拠にして、様々な立場の人間が正反対の歴史像を主張することがいくらかでもあるからである。) 大切なのは歴史について考えるときの方法論を錬磨していくことなのではないだろうか。専門家が並べる過剰なコンテンツを丸暗記してきたことから、歴史の学び方を学ぼうとしている、今日の歴史教育改革はそのためにある。

- ☛本書がすべてスタンダードな解釈を提示できているわけではない。

(例) 全体主義論は、著者が「反共産主義のイデオロギー」と断じるようなものだけではなく、その後のリバイバルがあったのではないか。現行の世界史探究の教科書にも「全体主義」記述はある。

たとえば、ケヴィン・パスモア、福井憲彦訳『ファシズムとは何か』(岩波書店、2016 年) は、全体主義論を次のように論じる。

——全体主義というのは次のような限定をつけた場合のみ、有用な概念である。それが、受容された理念によって形成される一つの世界観を押しつけようとする衝動を必然的に伴う、という点を忘れないようにすること。また、ファシストたちは全体主義的な計画を、多様なやり方で解釈していた点も忘れないようにすること、である。つまりわれわれは、ファシストのユートピアが、現在あるような社会と完全に切れている、とは考えないことだ。

実際、多くの人たちにとってのファシズムの魅力は、そこにこそあるのである。」

- 私たちは、歴史研究をはじめとする様々な歴史叙述が試みてきた〈実証〉〈解釈〉〈批評〉を参照しながら、自分自身の歴史叙述（歴史像）を謙虚に練り直し続けていくべきなのだろう…くらいのものなのではないだろうか。

4 本論「ナチスは「良いこと」をしたのか？」

（1）分析のフレーム

- ①その政策がナチスのオリジナルな政策だったのか。（歴史的経緯）
- ②その政策がナチ体制においてどのような目的をもっていたのか。（歴史的文脈）
- ③その政策が「肯定的」な結果を生んだのか。（歴史的結果）

（2）アウトバーン建設と雇用創出計画

- ①雇用創出計画は、ナチ政権に先立つパーペン、シュライヒャー政権の政策を基本的に受け継いだもの。アウトバーンもヴァイマル時代からの計画を引き継いだもの。
- ②アウトバーンは「一つの民族、一つの帝国」を強調するプロパガンダの効果をもった。
- ③ヒトラーが政権につく前にドイツ経済は景気の底を脱し、回復局面に入っていた。失業解消と景気回復のために決定的寄与をしたのは、軍備拡張であった。
 - それは他国の征服を前提とした無謀な計画であった。過剰な財政支出にもとづく軍需経済は、綱渡りの体制であった。
 - 戦時期のドイツ経済は、A. 占領地からの収奪、B.ユダヤ人からの収奪、C.外国人労働者からの収奪から成り立っていた。
 - 軍需大臣シュペーアが唱えた「軍需の奇跡」は、労働力不足を強制労働などによって補うことで成り立っており、戦争の帰趨を左右するほどの効果はなかった。戦争の終結を引き延ばし、多数の人命を犠牲にするだけに終わったと言える。

（3）労働時間と休暇、ラジオ、フォルクスワーゲン、歓喜力行団

- ①8時間労働制は、1919年に国際労働機関によって国際的基準とされていた。歓喜力行団も、イタリアのドーポラヴォーロの先例がある。国民受信機や国民車の開発・生産もナチス独自の政策とは言えない。
- ②労働者の全面的な管理統制という目的と、労働力の維持・教化の目的があった。
- ③歓喜力行団は、1938年には年間1000万人以上に旅行の機会を提供したが、圧倒的多数は日帰り旅行か国内旅行だった。賃金が増えたといっても、労働時間も伸びたので実質賃金は低下した。
 - 将来の消費を現在の宣伝で先取りをしている。＝バーチャルな消費（戦後の大量生産・大量消費社会を支えるメンタリティを形成した。）

（4）家族支援政策

- *政策：失業対策のために「女は家へ」を主張、「母の日」を国民的祝祭に、母親名誉十字軍の授与、婚外子の支援、母親学校の開催、第二次世界大戦により「女は家へ」はなし崩しとなる。
- ①「母の日」のアイデアはアメリカ人にあり、1920年代からドイツでも運動となっていた。母

性をほめたたえる動きは、戦間期のヨーロッパに共通して見られた。

②目的は、「民族共同体」の構築であり、政治的敵対者・ユダヤ人・障害者・反社会的分子とされた人々は排除されていた。

③確かに子どもは増えた。

1933年の出生数 14.7人／1000人 → 1939年 20.3人／1000人

しかし、結婚数の増加を出生率の伸びが若干下回っている。

多くの研究者が考えているのは、出生率増加は結婚の絶対数が増えたことにあり、政策のインセンティブはほとんど働かなかったというものだ。

☛ヨーロッパの他の国でもこの時期の出産奨励策はうまくいっていない。

(5) 先進的な環境保護政策

*政策：帝国自然保護法、動物保護法、森林種目保存法、有機農法、「ムダなくせ闘争」

①ナチスの環境政策でオリジナルなものはほぼ皆無。郷土保護運動は、「古き良き」ドイツをパッケージとして守ろうとするナショナリズム運動だった。有機農法は、第一次世界大戦後に影響力を拡大していた。

②目標は「民族共同体」の構築であった。動物保護政策は反ユダヤ主義政策だった。ヒムラーにおいては、有機農法がドイツ民族の東部入植プランとつながっていた。収容所では囚人の遺体が「肥料」として使われることもあった。

③自然保護区が増加したものの、他方で軍需生産のために森林を伐採したので、アクセルとブレーキを両方かけていた。食糧生産援助事業は心理的な動員の仕掛けとしては「有用」であったと言えるかもしれないが、現在の私たちが「良いこと」と評価するかは別の問題である。

☛戦争は、「究極の環境破壊」にほかならない。

(6) 「健康帝国ナチス」(ロバート・プロクター)

*禁酒運動、禁煙運動、がん撲滅の試み(集団検診、カウンセリングセンター)、「食の安全」

①ナチスのオリジナルなものはまったくない。

②ナチ体制には、ドイツ民族を「民族体」として一つの身体としてとらえる考え方があり、これは、「アルコール中毒患者」に対する「断種」、精神障害の患者に対する「安楽死」、ユダヤ人の追放などにつながっていた。

③アルコールやタバコの消費は減らなかった。がん関連法は結局制定されなかった。戦争の長期化でがん研究どころではなくなってしまった。

☛「本書で初めて「ナチスがした良いこと」の可能性が浮上してくる。」男性の肺がんリスクは高まったが、女性に関しては2万人以上の人々が肺がんから救われた可能性がある。しかしその可能性の裏に断種や「安楽死」や家父長制干渉主義があったのだとすれば「良いこと」と見なせるだろうか。

(7) 【執筆者への問いかけ・その1】分析のフレームについて

・①のオリジナル性の有無の検討は、武田知弘『ナチスの発明』に対する反論と言えるが、「良いこと」であるかいなかの指標にはほとんどなりえないであろう。

・②の目標に関する検討は、カントの哲学が「正義」を問うような動機説の指標であり、③の成果に関する検討は、ベンサム功利主義が「正義」を吟味するような結果説の指標と言える。つまり、ナチスの政策が「正義」たりうるのかを現在の私たちが考察するときの「歴史批評」の指標となっていると言えよう。これは、あくまで現在の視点からの過去の裁断であ

る。特に③については、ホロコーストや敗戦とどこかで必ず交錯するわけだから、「絶対悪」の烙印が演繹法的に押されがちになる。その論理は大切であるが、それだけで歴史叙述を終わらせてよいのかということを繰り返し、問いたい。

(8) **【執筆者への問いかけ・その2】** 最新の研究成果を参考にしながら、結論にあわせて捨象していることはないか。

・たとえば、小野清美『アウトバーンとナチズム——景観エコロジーの誕生』(ミネルヴァ書房、2013年)のいくつかの論点は以下のとおり。

- ①ナチ期は法制化のレベルでは、戦後の西ドイツで1970年代まで効力をもった動物愛護法や帝国自然保護法、戦後の法制定の核心的要素をもつ帝国森林法案など、ワイマル共和国に比べて「めざましい結果」を残した。アウトバーン建設においても環境主義・エコロジーとのかかわりで注目するような議論が展開された。
- ②帝国自然保護法について、研究者は、ナチ・イデオロギーとの関連性を主張する説と無縁を主張する説にわかれる。私(小野氏)は、本質的にナチ法ではないが、ナチ思想と無縁ではないと考えている。
- ③ドイツ道路制度総監、軍需大臣、ドイツ水利・エネルギー総監をつとめたトットは、代表的なテクノクラートで、ナチ指導層から距離をとりつつ、しかし民族全体に奉仕するような近代技術としてアウトバーン建設を推進した。「景観代理人」という助言者の立場からアウトバーンの景観形成を設計したザイフェルトは、時にトットと対立しつつ、自分の方針(アウトバーンの自然の起伏に沿った弧を描くルートや景観への埋め込みなど)を認めさせていった。
- ④ザイフェルトは戦後ドイツでも自然保護・景観形成の分野で活躍し、専門家による景観計画・形成という言説は体制転換をこえて戦後ドイツにも連続した。アウトバーンの実践のなかには、現代的なエコロジーの観点が打ち出されていた。
- ⑤トットやザイフェルトらは東方の景観形成計画にもかかわっており、環境帝国主義ともいうべき思考もあった。
- ⑥ナチ体制は、伝統的なヒエラルヒーの硬直性をとり除いた水平的な決定作成過程をもっていたために、各種専門家の下からのイニシアティブが可能になり、専門家たちとナチズムのあいだには「相互のダイナミズム化」が生じた。
- ⑦ザイフェルトらは、人種差別法の制定・遂行には何の声も挙げておらず、この時代がドイツの環境運動史における汚点をなす時代であったことは確かである。しかし、時代の状況の産物であるこの点だけを拡大して、ザイフェルトらの思想・議論が、持続可能性や未来世代への責任という現代的テーマを提起するなど、戦後の環境運動へのポジティブな連続性をもつことを否定するとすれば、それもまた同様に一面的であろう。
- ❖ 一方、『ナチスは「良いこと」もしたのか?』では小野本を参考文献にあげ、「ナチズムと自然保護のきわめて複雑な関係性について考える上で、真っ先に参照されるべき文献」と紹介する。しかし、本文の行論では、上記②③④⑥⑦のファクトや解釈・批評は捨象され、次のように結論づけられる。——「第二次世界大戦を引き起こし、環境面でも多大な損害を与えたナチ体制の環境政策から一部を抜き出して、「ほら良いこともしたではないか」と主張することに、いったいどれだけの意味があるのだろうか。」
- ❖ 小野氏の緻密な歴史分析は、「ほら良いこともしたではないか」という表現に括られるものではないはずである。
- ❖ もちろん小野寺氏・田野氏も多く歴史書を読解し、そこから実証や解釈を切り取って、

独自の解釈・批評を行っているわけだから、参照した歴史書に捨象した部分が出てくるのは当然である。しかし、そうであるならば、本書は、最新の研究成果に立脚した入門書というよりも、最新の研究成果に独自の解釈をほどこして提示するナチスの概説であると、自分たちの立場性を明示すべきだと思われる。

- ・著者の結論を捨象し、それ以外のところを切り取って、自分の論理の根拠にしているのは、ロバート・N・プロクター『健康帝国ナチス』（草思社、2003 年）の利用についても同じではないか。また、プロクターが挙げている、後世につながった豊富なナチスの健康政策のなかで捨象されたものが複数ある。

——「科学」と「社会」の関係が一般に考えられているよりももっと複雑なものだということもわかる。ナチスのガン研究という小宇宙を見ても、科学が政治を表現し、あるいは政治が科学を表現するそのありようはじつに多様だ。科学者がファシズムをあおり、ファシズムが科学をあおり、ファシストはどういう科学を支援すべきかを議論し、科学者はどういうファシズムが望ましいかを議論する。科学と政治との境界は決して固定化したものではなかった。それはこの先も変わらないはずである。

——ナチスのガン戦争を見ると、ナチスのしたことのすべてが国民の健康にとってマイナスだったわけではなく、時にはプラスに——少なくともある期間、国民のある部分に対して——働いていたらしいことがわかる。ナチスの科学の残虐な面だけを見れば、この時代の出来事を非日常的で非人間的なものとして片付けてしまいがちだが、話は「狂気の医学」というだけでは片付かないのである。

- ・著者が参考文献の真っ先に挙げた石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』（講談社《現代新書》、2015 年）は、ナチ政権が失業者の減少を成し遂げたことが、人々の心に刻み込まれたことを見つめている。石田氏は、著者たちが指摘するような、軍需産業の振興による「からくり」があったのだということを踏まえたうえで、「魅力」がいかに人々をとらえたかを論じているのである。

——ナチ時代のドイツを考えるうえで見落としてはならないもうひとつの論点は、ヒトラーとナチ体制が人びとを惹きつけた「魅力」についてである。

——ゲッベルスの啓蒙宣伝省は、600 万人という絶望的な数が総統と国民の懸命な努力によって次第に減少していく様子を、ラジオのニュース番組や新聞報道を通じて逐一詳しく伝え、人びとの強い関心を惹きつけた。こうして失業問題の解消は、ヒトラーのもとで一丸となったドイツ国民の一大事業として喧伝され、「労働をめぐる戦い」に勝利したヒトラーの偉業が大々的に讃えられたのだ。

（石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社《現代新書》、2015 年）

——第二次世界大戦後も長らくなされた世論調査でもこの「実績」「業績」がヒトラーと分かちがたくポジティブに結びつけられていたことを忘れてはならない。冒険的侵略戦争に乗り出さなければ、あるいは戦争に敗北さえしなければ、ひょっとしたら「史上最高の将帥（グレーファツ）」だったかもしれないと考える人間が戦後も少なからず存在したということである。

（芝健介『ヒトラー』岩波書店《新書》、2022 年）

（9）【執筆者への問いかけ・その3】ナチスが「良いこと」をしたという歴史意識は、戦後、どの

ように継続／形成されてきたのだろうか。

- ・小野寺氏が詳細に分析した、兵士たちの戦時中の意識が戦後に継続しているということがないのかどうか、ご教示いただきたい。

——徹底的に戦い続けるという意志を調達するうえでは、敵や他者に対する蔑視、敵愾心、恐怖感だけでなく、肯定的な自己イメージと、そうした「素晴らしい何か」が存亡の危機にさらされているという強い被害者意識も決定的に重要であった。

(小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」』山川出版社、2022年)

- ・ナチスの政策は、ショア（ホロコースト）や第二次世界大戦という決定的な行為に帰結したことは言うまでもないが、歴史は「敗戦」ですべてが断絶したわけではなく、戦後に継承され、新たな形で発展したものもあるだろう。いずれにせよ、「良いこと」はなかったのか
という問い自体が内包する曖昧さを自覚しないと、議論が拡散する。

(10) 現行の高校「世界史探究」の記述を見てみよう

- ・東京書籍『世界史探究』（山本秀行ほか）

——ナチスはアウトバーン（自動車専用高速道路）の建設や軍需生産によって失業を克服し、1936年からは「四か年計画」により戦争に向けた経済体制づくりにのりだした。国民は仕事の確保やナチスによる休暇旅行の普及などを歓迎したが、学問や思想、言論、集会などはきびしい統制下に置かれた。多くの反対派やユダヤ人、ロマの人々などは、親衛隊（SS）や秘密国家警察（ゲシュタポ）により迫害され、強制収容所に送られた。そのため、学者や文化人で亡命する者があいついだ。

- ・山川出版社『詳説世界史』（木村靖二ほか）

——ナチス・ドイツは、計画経済などソ連の社会主義から学んだ四か年計画によって軍需生産を拡張し、アウトバーン（自動車専用道路）建設などの大規模な公共事業で失業者を急速に減らした。また、イタリアのファシズムにならって団体旅行などのレクリエーションを組織したほか、福祉事業の整備（多産家庭に対する補助金など、保守的な家庭観、女性観にもとづいていた）やラジオ放送など大衆娯楽の充実につとめた。一般のドイツ国民は、これらの政策を歓迎した。

- ・帝国書院『新詳世界史探究』（桃木至朗ほか）

——ナチ党政権は、高速自動車道路網（アウトバーン）を建設するなど、公共事業と軍需生産によって失業者を減らし、ある程度の経済復興を成し遂げた。一方で、親衛隊・突撃隊と秘密国家警察（ゲシュタポ）で反対派とユダヤ人を迫害するなど、全体主義国家をつくり上げた。

——3本のコラム「全体主義」「ファシズムが利用した子どもたち」「たばこと禁煙の歴史」

- ・【考察】そもそも世界史教科書は、ナチスの国内政策については、当時の人々による同意／支持とその非人道的犯罪の双方を見つめた、バランスのとれた歴史叙述をしていると言えよう。軍需産業による失業者の減少が、戦争につながる道であったことも学ぶ側は十分理解できるのである。

(11) 本書を世界史の授業でどのように活用するか

- ・ナチスの政策の経過についての知識の整理として本書を活用する意義はある。しかし、私は、「ナチスは「良いこと」もしたのか？」という問いよりも、当時の人々の歴史意識を解釈する問いを作り、それを現代からの歴史批評の問いに接続させていくことが大切であると考えている。

- ☛「(A) なぜ当時のドイツ人は、ナチスを積極的であれ消極的であれ支持したのだろうか。そのときユダヤ人迫害や戦争の危機はどのように意識されていたのだろうか。次の史料から読み取れることを考察しなさい。」

《資料は2点》

①ロバート・ジェラテリー、根岸隆夫訳『ヒトラーを支持したドイツ国民』（みすず書房、2008年）

②ミルトン・マイヤー、田中浩・金井和子訳『彼らは自由だと思っていた』（未来社、1983年）

- ☛「(B) Aのドイツ人のナチス支持について、現代に生きるあなたはどのように意義づけるか、考察しなさい。」

- ・上記のような生徒の歴史解釈・歴史批評は、必ずしも本書の言う入門的な知識・解釈を前提としなければできないものではないか。大切なのは思考の方法であろう。

5 本書の「歴史認識論」

- (1) 田野氏のツイッター投稿「ナチスの政策で肯定できるとこないっすよ」を「炎上」させたネットの人々について…

- ・「政治的正しさ（ポリコレ）」、学校を通じて押しつけられる「綺麗事」への反発
- ・「だが「ナチスは良いこともした」と主張する人たちにあっては、そうした反権威主義的な姿勢はいわゆる「中二病」的な反抗の域を出ず、ナチズムが実際にどんな体制であったかについては無関心であることが多いようだ。」

自由に物を言いたいという欲求、自分たちは本当のことを言っているという優越感

- (2) 専門家は粘り強く専門知識を伝える努力をする必要がある。

- ・最新の研究成果を踏まえつつ、それを広く一般に紹介するような入門書。
- ・「歴史知識」を伝えるだけでなく、社会の「歴史意識」にまで踏み込んで語りかける必要がある。（現在という磁場を十分に意識して執筆した。）
- ・ナチ体制の本質は、「ならず者国家」であった。

- (3) 【執筆者への問いかけ①】

- ・「ナチスは良いこともした」と発言している人々の立場性のなかに、「政治的正しさ（ポリコレ）」、学校を通じて押しつけられる「綺麗事」への反発があるのだとすれば、それは全否定されるべきものではないと、著者は書いている。「だが」…と続けて、ネット上の論争を思い描いて、「ナチスは良いこともした」と発言している人々を「中二病」とひとくくりにしてしまう。歴史書の中で、それぞれの人生がある人々を束ねて「中二病」という侮蔑的なレッテルを貼るべきではないと私は考える。さらに言えば、そうしたレッテル貼りを許容した岩波書店の編集体制を、私はとても残念に思う。
- ・「自分たちは本当のことを言っているという優越感」は、一般論として自分をたえず見つめ直すためにもやわらげた方が良く、そのことは「ナチスは良いこともした」と発言している人々も、それを批判する著者たちにも、双方にあてはまるのではないか。

- (4) 【執筆者への問いかけ②】

- ・ヒトラーとナチ政権の史上まれに見る戦争犯罪や非人道的政策について、目をそらさず見つ

めて、その罪過を二度と繰り返さないために何が必要なのかを考えることは、「ナチスは「良いこと」もしたのか」という問いを考えて、「良いこと」が皆無であることを確認することを必須の思考としているわけではないと、私は考える。

- ❖ 「良いこと」が皆無だという命題は、たった一つの反証でも崩れてしまうはずの、もともとても無理のある言説である。
- ❖ ナチ政権の罪過から目をそらさないということは、その個別の政策の歴史の総体に迫ろうとすることである。「そこで何があったのか」「そのあったことは、他の事象とどう関連しているのか」「そのことの意味は、どう考えればよいか」…考えるべき問いとは、具体的なものであるべきなのではないか。
- ❖ 著者が深い憂慮をもっている、武田知弘『ナチスの発明』（彩図社《文庫》、2011年）は、確かに細部のファクトの実証・解釈にいくつもの誤りがある。しかし、主観的にはナチスを免罪しようとしている執筆意図があるわけではない。

——彼らの所業を1つ1つ洗いなおしてみると、彼らは決して悪魔などではないことがわかる。時代の強烈な制約の中で、全身全霊を傾けて必死にユートピアを模索していた。悲しいかな、それが彼ら「ドイツ・アーリア民族」のためだけのユートピアだったということだ。

ナチス・ドイツというのは、巨大な矛盾を持った国だった。

武田氏のこの結論では、①ナチスの悪魔性を「ない」ということで無理な一般化をしてしまっている。さりとて「良いことはない」という論理も同じ土俵に上ってしまうだろう。②「巨大な矛盾を持った国だった」というのは、そのとおりなのだが、私が残念に思うのは、その「矛盾」のありようを具体的に解明して、そのことの意味を省察することが、武田氏の本には薄い。読者は、ナチスにはこんな面があったんだという「へえー」という思いで終わってしまうのだろう。そこに著者たちが危機感を抱くのは、私もよくわかる。しかしだからこそ、「巨大な矛盾」のありようを見つめた小野氏やプロクター氏、石田氏らの繊細な論理を捨象して、「良いことはない」という結論を牽引した本書にも、私は違和感を禁じ得ないのである。

- ・「歴史知識」を伝えるだけでなく、社会の「歴史意識」にまで踏み込んで語りかける必要がある…という歴史実践の姿勢には深く共感する。そして学問的蓄積を踏まえた入門書を作ったという著者たちの努力にも心から敬意を払いたい。ならばこそ、本書には、今とは違う分析視角が望ましかったのではないだろうか。

- ・かつて田野氏は「ファシズムの体験学習」を実践して次のように書いていた。

——世論全体がヘイトで染まるような事態を防ぐには、「ファシズムはいけない」などと理性に訴えるだけでは不十分で、場合によっては逆効果にもなりうる。むしろ私たちは、運動の参加者たちが味わう解放感、自らの感情を何の制約も受けずに表現できる「自由」の魅力に注目しつつ、彼らの感情に積極的に介入することで、過激化の危険性を摘んでいく必要がある。

万能な処方箋が存在しない難しい課題だが、「ファシズムの体験学習」は一つの方向性を示している。集団的熱狂の渦に巻き込まれる怖さを体験させ、理性を圧倒するファシズムの危険性に目を開かせる授業実践は、「流されずに異を唱える力」を育むのに有効だと考えられる。少なくともそれは、ファシズムを「悪」として否定するだけの硬直した批判を乗り越え、なぜそれが人びとの感情に訴えるのかを内在的に考える手がかりを提供するはずである。

(田野大輔『ファシズムの教室』大月書店、2020年)

■今回、著者たちは現代社会の歴史認識の「磁場」を意識し、許せない言説の「自由」「解放感」に介入すべく本書を刊行し、多様なメディアに身を置き、SNSに膨大な言葉を書き込んでいる。そうした言論活動は、(お二人がそうであるわけではないが、)ともすると、歴史対話というよりも言論戦略になることで、不寛容を批判する者自体の不寛容を生み出す危険と隣り合わせになるだろう。これは歴史教育者の私のほうの自戒の念である。

おわりに

最後にこのことを強調させていただきます。本書の著者の文章は、誰もが明晰に理解できる魅力に満ちており、ナチスの政策の多様な論点としてとりあげられた歴史事象は、どれも現代的な意義が大きいものです。こうした著者の力量こそが、とても多くの読者をひきつけたのであって、誰もができることではありません。

正直、この書評を書くのはとても辛かったです。眠れない夜をいくつも過ごしました。自分自身の違和感に戸惑い続け、引き受けなければよかったと何度も後悔しました。

でも、次第にこう考えるようになりました。小野寺氏・田野氏の歴史家としてナチスに対峙するその研究姿勢から、私は様々なことを学ぼうとしているのだ、と。著者からの問いかけで、内なる歴史対話をしていたのです。

著者の迫力に誘発されて、私がとても多くの「問い」を投げ返すことになったこと自体が、著者からいただいた大きな学恩です。私は、この学恩を、本日のセミナーに参加してくださった皆さんと一緒に、さらに次の探究につなげたいと思って、以上の問題提起をさせていただきました。

著者のお二人に、心からの感謝を申し上げます。

【参考文献】

小野寺拓也・田野大輔(2023)『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』岩波書店《ブックレット》。

○

小野寺拓也(2022)『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」——第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社《YAMAKAWA Selection》。

田野大輔(2007)『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』名古屋大学出版会。

田野大輔(2020)『ファシズムの教室——なぜ集団は暴走するのか』大月書店。

○

石田勇治(2015)『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社《現代新書》。

ヴィルシング、アンドレアスほか(2019)『ナチズムは再来するのか?』慶応義塾大学出版会。

小野清美(2013)『アウトバーンとナチズム——景観エコロジーの誕生』ミネルヴァ書房。

ジェラテリー、ロバート(2008)『ヒトラーを支持したドイツ国民』根岸隆夫訳、みすず書房。

芝健介(2021)『ヒトラー——虚像の独裁者』岩波書店《新書》。

武田知弘(2011)『ナチスの発明』彩図社《文庫》。

南京事件調査研究会編(1999)『南京大虐殺否定論 13のウソ』柏書房。

パスモア、ケヴィン(2016)『ファシズムとは何か』福井憲彦訳、岩波書店。

プロクター、ロバート・N(2003)『健康帝国ナチス』宮崎尊訳、草思社。

マイヤー、ミルトン(1983)『彼らは自由だと思っていた』田中浩・金井和子訳、未来社。